

キーツ研究

—『キーツにおける美と愛』—

池 間 昌 典

1

キーツは1795年に生まれ、1821年にローマで25歳の短い生涯を終えた薄幸の詩人である。母方の祖父、ジョン・ジュニングズがロンドンのシティーで経営する貸馬車業で働いていた、トーマス・キーツを父に、ジュニングズの長女、フランセスを母とし、キーツは1795年10月31日に平穏な中流家庭の長男として、ロンドンの下町で誕生した。1797年2月28日に弟ジョージ、1799年11月18日に弟トーマスがそして1803年6月3日には妹のメアリーが誕生し、何事もない平和な日々を送っていた。

1803年9月にジョン・キーツと次男ジョージはエンフィールドにあるクラーク学院に入学した。8歳で入学し14歳で退学するまでのエンフィールドでの7年間の生活が、キーツの運命に大きな変化をもたらすことを、誰も予想することは出来なかったのである。運命の日は1804年の4月15日であった。ロンドン郊外のエンフィールドにあるクラーク学院の寄宿舎にいる二人の幼い息子たち、ジョンとジョージに会いに行き、ロンドンに帰る途中で馬車が、あいにくの雨のために転倒し、父トーマスが馬車の下敷きになって死亡するという事故である。父トーマスは31歳であった、そして母フランセスは、29歳の若さで未亡人になってしまった。若く、魅力的で、当時としては活発な母親は、子供と家庭を捨て、その後、二度結婚するが、幸せでなく、最後は結核になり家に帰ってくるのである。そのような、自由奔放に生き、病魔に侵され、男に捨てられ

た、哀れな母親でも、母親の愛情に飢えたキーツは、かいがいしく看病するのである。9歳で父を亡くし、残った親、愛する母親の快復のために、昼夜をいとわず献身的な看病をしたにもかかわらず、1810年3月に母親フランススは、4人の子供を残し、35歳の生涯を終わるのである。

両親の死後、母方の祖父ジョン・ジェニングズの残した遺産のお陰で、エンフィールドのクラーク学院を退学後も、学業を続けることが出来た。キーツは1811年の夏にクラーク学院を退学し、キーツ家のホーム・ドクターであり、母親フランススの最後を看取った医師ハモンドの元で5年間医学を修め、その後1年間ロンドン・ブリッジの近くに現在でも存在する名門のガイ・ホスピタルで研修し、医師免許を取るが、医師として独立せずに、詩作の道を歩むことになるのである。

キーツが医師として独立せずに、詩人として生きていく大きな契機となったものは、クラーク学院在学中に、校長の息子チャールズ・クラークとの交友関係が非常に大きな影響を及ぼしていると言わざるをえない。

事実、1809年頃、キーツが14歳になり、やがて7年間過ごしたクラーク学院を退学し、エンフィールドを去るようになる年であるが、文学に対する関心も強くなり、読書量も一段と多くなっている。クラーク学院在学中に校長の息子チャールズ・クラークからキーツは文学的に非常に大きな影響を受け、後に医学を修めながらも、文学に対する熱情を断ち切ることが出来ずに、詩人として生きるべきかどうか、と苦悶するのである。

当時、ロマン派の詩人の中で、正規の大学教育を受けていない詩人ということとは、まず考えられない時代であった。ワーズワース、コールリッジ、バイロン、シェリーなどオックスフォードかケンブリッジ大学で学び、最高の学問と教養を身につけた者ばかりであった。そのような詩人たちに伍して、大学教育を受けなかったキーツが、非常に短い期間に詩を作り、後に高い評価を受けるようになったのは、彼自身の才能は言うまでもないが、クラーク学院時代に共に多感な青春時代を送り、喜びも、悲しみも共有することが出来た先輩であり親友でもある、チャールズ・クラークから受けた恩恵抜きには語ることが出来

ない。キーツはクラーク学院時代にラテン語とフランス語を学び、語学の面でもその才能を、いかに発揮している。すなわち、ラテン語の本、Aeneidの翻訳でクラーク学院の院長賞を得たと言われている。また、校長の息子であり、文学青年でもあったチャールズ・クラークの影響を早くからうけ、ギリシャ語やイタリア語を独学で身につけ、多くのギリシャの本やダンテの『神曲』などを読んでいたようである。このような時に、チャールズ・クラークは、キーツの良き理解者であり、また、時には良き先生でもあったのである。

チャールズ・クラークは早くから文学に親しみ、当時の詩人であり、進歩的な批評家であるリイ・ハントの発行する雑誌『ジ・イグザミナー』の愛読者でもあった。このことが後にキーツがリイ・ハントと交友関係を持ち、詩人として世の中に出てくる契機ともなるわけである。キーツの良き理解者であり、早くから詩人としてのキーツの才能を見抜いていたクラークはキーツをリイ・ハントやシェリーに引き合わせ、処女詩集の出版のために尽力するのである。

リイ・ハントがいなければ、恐らく、詩人としてのキーツの存在もなかったであろうから、処女詩集を出版するにあたり、その喜びと感謝の意を表すために、キーツはリイ・ハントに捧げる献詩を書くのである。

DEDICATION

TO LEIGH HUNT, ESQ.

Grory and loveliness have pass'd away;
For if we wander out in early morn,
No wreathed incense do we see upborne
Into the east, to meet the smiling day:
not crowd of nymphs soft voic'd and young, and gay,
In woven baskets bringing ears of corn,
Roses, and pinks, and violets, to adorn
The shrine of Flora in her early May.

But there are left delights as high as these,
And I shall ever bless my destiny,
That in a time, when under pleasant trees
Pan is no longer sought, I feel a free,
A leafy luxury, seeing I could please
With these poor offerings, a man like thee.

キーツはこの詩の中で、これから詩人として旅立ちをしようとしている不安な気持ちを謙虚に吐露している。

栄光も何もない自分が、ただ一人、朝早くさまよい
歩いていても、東の空から立ち昇る花の香をかぐこ
とも、ほほえみをたたえた太陽と出会うこともなく、
5月のはじめに花神、フローラに捧げる麦の穂、薔薇
すみれ、などを摘み、籠にいれながら騒いでいる妖精
たちに出会うこともない。木々の下には牧神の姿も
みえないが、自分は自由な青葉の喜びを感じることが
出来るし、詩を書く高貴な喜びももっているのだ。
このような、まずい、貧弱な詩であるが、詩を書くこ
とによって、あなたのような方々に喜んで頂けるのだ。

2

キーツはその短い生涯の中で、常に、美を追求し、彼の求める理想美は、人類愛だと感じはじめるのである。Sleep and Poetry や Endymion などのような物語詩の中で、自分の理想とする美を求め、表現しようとするのだが、もっと自分を主観的に表現することが出来る Ode を書くようになるのである。

1819年4月に Ode on a Grecian Urn 「ギリシャ古瓶のうた」、Ode to Psyche

「サイキによせるうた」を書き、5月には Ode on Indolence「怠惰のうた」、Ode to a Nightingale「ナイチンゲールに寄せるうた」、Ode on Melancholy「憂うつのうた」、そして9月には To Autumn「秋に寄せるうた」を書き上げてしまうのである。

キーツは Ode on a Grecian Urn の中で、芸術美の永遠性を訴えようとするのである。古いギリシャの瓶を眺めていると、彼の心は現実を離れ、イマジネーションの世界に入り、瓶の表面に描かれた狩りをする人々や動物、そして牧歌的な風景と対峙する。彼の言う美とは、「一般的な美ではなく、瞬間的な美こそ永遠性を持った美である」と訴えるのである。

Thou still unravish'd bride of quietness,
 Thou foster-child of silence and slow time,
 Sylvan historian, who canst thus express
 A flowery tale more sweetly than our rhyme:
 What leaf-fring'd legend haunts about thy shape
 Of deities or mortals, or of both,
 In Tempe or the dales of Arcady?
 What men or gods are these? What maidens loth?
 What mad pursuit? What struggle to escape?
 What pipes and timbrels? What wild ecstasy? (1)

「おまえは、今でもけがれのない静寂の花嫁だ、沈黙とゆっくりとした時の子供である」、とキーツはこの神秘的なギリシャの古瓶に呼びかけながら、驚きと共に永遠の芸術美に陶醉するのである。

第2 stanza で、キーツは「耳に響くメロディは美しいが、耳に響かぬ音楽は、なおさら美しい。さあ、その静かな笛の調べを聞かせておくれ。」と

彼は変わることのない芸術の永遠的な美を語るのである。

Heard melodies are sweet, but those unheard
Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;
Not to the sensual ear, but, more endear'd,
Pipe to the spirit ditties of no tone: (2)

第3 stanza では、「疲れをしらぬ幸福な笛ふきよ、おまえの吹き鳴らすメロディーは永遠に新しい。幸せな恋よ、永遠にさめない、悦びとなる恋よ」と語りかける。

And, happy melodist, unwearied,
For ever piping songs for ever new;
More happy love! more happy, happy love!
For ever warm and still to be enjoy'd,
For ever panting, and for ever young; (3)

また、第4 stanza では、「神秘的な司祭と流れのほとりか、海辺の小さな町か、はたまた、平和な砦のある山の上の町なのか、わからないが、おまえの町の通りは永遠に静まりかえっていることだろう」と歌う。

第5 stanza は彼の詩想、即ち芸術美の永遠性を最もよく表現した部分である。特に、最後の2行にキーツの求めた美、即ち「芸術は永く、人生は短く、はかない」と訴える彼の心の叫びが聞こえてくるようである。

'Beauty is truth, truth beauty', — that is all
Ye know on earth, and all ye need to know. (4)

3

先にも述べたように、キーツの人類愛は彼の詩のいたるところに見られるが、若くして両親を亡くしたキーツは、二人の弟、ジョージとトーマス、それに唯一人の妹、メアリー（ファニー）に対しても特別な愛情を注いだ。また、彼が生涯で愛したが、結ばれることのなかった二人の女性、特に、ファニー・ブローンに宛てた、数多くの手紙を残している。

1817年9月10日水曜日 妹、ファニー・キーツに宛てた手紙の中で両親を幼くして亡くし、離れて暮らさざるをえなかった妹に、兄として何もしてやることの出来ない辛さと、細やかな愛情を感じ取ることが出来る。

「さあ、いつものやりとりを、——ちょっとした質問でやりとりを始めよう。あなたのささやかな望みと、喜びを僕がしる楽しい方法で、やりとりをはじめましょう。あなたの兄として、ふさわしい方法で、あなたの望みをかなえてあげましょう。わたしたちは、あなたが物心ついた頃からほとんど一緒に暮らしたことはありませんね。だから、あなたの望みが何なのかわからない。でも、二、三度こうして手紙をやりとりしているうちに、あなたの望みが分かり手紙で話し合うことが出来るようになるでしょう。」

My dear Fanny,

Let us now begin a regular question and answer — a little pro and con; letting it interfere as a pleasant method of my coming at your favorite little wants and enjoyments, that I may meet them in a way befitting a brother.

We have been so little together since you have been able to reflect on things that I know not whether you prefer —

.....

.....
However in a few Letters I hope I shall be able to come at
that and adapt my Scribblings to your Pleasure. (5)

1818年12月に弟、ジョージに宛てた手紙で、キーツは次のようにふれてる。

「夏の間、ブラウンの家を借りていたブローン夫人はまだハムッドにいる。
とても素敵な女性である。その娘は、美人で、しとやかで、とても素敵だ。」

と、後に、宿命の恋人となるファニー・ブローンに初めて会ったことを、弟に
告げるのである。

To FANNY BRAWNE Wednesday 13 Oct. 1819

My dearest Girl,

This moment I have set myself to copy some verses out fair.
I cannot proceed with any degree of content. I must write you
a line or two and see if that will assist in dismissing you from
my Mind for ever so short a time. Upon my Soul I can think of
nothing else.

.....
My love has made me selfish. I cannot exist without you. I am
forgetful of every thing but seeing you again — my Life seems to
stop there — I see no further. (6)

「今、ある詩の清書に取りかかったところなのだが、
すこしも、先に進めないのです。ほんの少しの間でも
あなたのことを考えないですむかどうか、やってみな

ければならない。でも、どうしても、あなた以外のことは考えられないのです。あなたなしには生きて行くこともできない。お目にかかりたい。」

と、もう、どうすることも出来ない、切々たる思いを、最愛のファニーに伝えるのである。母親の愛に飢えたキーツは初めは、ブローン夫人を慕うのだが、次第に娘のファニー・ブローンへの愛に変化していくのである。

4

キーツが詩人としてその才能を、いかに発揮するのはほんの数年である。特に、1819年の4月から9月にかけて書かれた、一連の *odes* に彼の詩想が凝縮され、いとも簡単に詩作されたかのように考えられがちだが、決してそうではなかったのである。Ode on Indolence に見られるように、毎日なにもしないで、ただ無為に過ごすことを望むこともあった。

How is it, Shadows! that I knew ye not?
 How came ye muffled in so hush a mask?
 Was it a silent deep-disguised plot
 To steal away, and leave without a task
 My idle days? Ripe was the drosy hour;
 The blissful cloud of summer-indolence
 Benumb'd my eyes; my pulse grew less and less;
 Pain had no sting, and pleasure's wreath no flower:
 O, why did ye not melt, and leave my sense
 Unhaunted quite of all but — nothingness? (7)

「どうしておまえたちは、そんなにこっそりとやって来て、

私に仕事をさせずに、怠惰な日々を送らせるのか、私の
目をしびれさせ、脈拍をあやしくさせるのか。」

と、生みの苦しみを語るのである。

Ode on Melancholy では美と異なる melancholy は意味のないものであり、美ではなく、恐れや悲しみと結びつくような melancholy は意義のないものであると、訴えている。Ode to Psyche では愛によって不死身となった人間の魂を表現し、Ode to a Nightingale では人生のはかなさ、無常さ、を語り、ナイチンゲールの鳴く声に自然美と理想美を求めたのである。キーツの詩想で一貫して言えることは、はかない人生において、瞬間的な喜びを求め、そして、永遠の美の中にある一瞬の喜びを描こうとしていることである。

- 註1 Ode on a Grecian Urn の第一 stanza
- 註2 同第2 stanza
- 註3 同第3 stanza
- 註4 同第5 stanza
- 註5 The Letters of John Keats To Fanny Keats
- 註6 同 To Fanny Brawne
- 註7 Ode on Indolence の第2 stanza

参 考 文 献

- Lowell, Amy: John Keats
- Muir, Kenneth: John Keats
- Pettet, E. C.: On the Poetry John Keats
- Ward, Aileen: John Keats
- Saito Takeshi: Keats' view of Poetry
- H. E. Rollins: The Keats Circle, Letters and Papers
- H. W. Garrod: Keats
- Robert Bridges: Collected Essay Papers
- Maurice Buxton Forman: The Letters of John Keats
- J. M. Murry: Study in Keats
- Henry Ellershaw: Keats